

高島藤樹志

(題字は、竹脇景卿先生によるものです)

発行
NPO法人 高島藤樹会

〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX 0740(32)4156



藤樹紙芝居 第1作の表紙

「これを機に、近江聖人『中江藤樹先生』の教えである『良知の心』を広く学ぶ機会にしたい」

●安曇川町では、早くから『藤樹先生』という本があり、小学生が、先生の生き方を学んでいた。

良知の心を楽しく学べる
『藤樹紙芝居』の制作

教材委員 北川暢子

と、当時の福井町長様を中心に、熱く語り合つたことを覚えてる。私は、教師の立場から、「誰もが解りやすく学べる紙芝居を作つてはどうでしょうか。」と提案し、皆さんの賛意をいただいた。

こうして、四〇〇年祭の年に『子どものころの藤樹さん』と『車が田におちた』の二話を、藤樹先生生誕四〇〇年祭実行委員会で完成。滋賀県内の全保幼小中学校に、四〇〇年祭の記念事業の一つとして配布することができた。

●「紙芝居だと、年齢を問わず、藤樹さんの方がよく解り、楽しく学べる」との評価をいただいた。四〇〇年祭後は、安曇川町の地域助成金と「高島藤樹会」予算を戴きながら、計十八巻の発行を継続できた。委員一人ひとりの持ち味が生かされて、先生の当時の生計の様子・使われた道具・村人達との関わりや学問の進め方等が、詳しく調べられ、より実感の伝わる表現ができたのである。

●今は、子ども会や老人会等からお呼びがあると、喜んで出向いていふ。今後も、多くの場で活用を図つていきたないと考えているので、気軽に声をかけていただくよう、紙面を借りてお願いしたい。

ひじりの声

上田藤市郎

しかも最も身近なところでの実行から始める。それは家族である。親子、夫婦、兄弟姉妹の間で誠実でなくて、どこに正しい生き方があるだろうか。最近の政治家等の金銭疑惑、不倫騒動、失言など軽薄な言動に驚く。本来、「政」とは正しくなおすという意味なのである。出馬の志が疑われる。家族への愛を隣人へ広げるのが大事である。メディアに取り上げられるために行動しない。天災の多い日本、誠意の義援の志を実行したい。

**藤樹人間学塾：
藤樹思想を学び考え方実践する**

塾長 田中清行

藤樹人間学習会は四月から、「藤樹人間学塾」として再スタートすることになりました。三月で『大学解』を終わりましたが、本会報では、本年の学習会の模様をお伝えし、五月以降

の予定をご案内いたしました。

一月九日（土）午後、第53回学習会を安曇川公民館で行いました。

最初に百歳を超えてなお現役で活躍されている医師、日野原重明さんが信条とされている「新しく始める」ということを忘

れなければ老年というの

が、徳を積むことが大事で、そのためには善い心を持つよう努力するこ

とが大事である」ということです。フリートーキングでは「徳とは何

め」を潤す。心広く体ゆたかになります。故に君子は必ずその意を誠にす」の項を学びました。この項の概意は、「心身をゆたかにするためにには善い心を持つよう努力するこ

とが大事である」ということです。フリートーキングでは「徳とは何

か」……徳は清らかな布施によつて簡単に得られると釈尊は言われている。「道徳とは何か」、「道徳を体

現している人は」……鍵山健三郎さんたちではないか、などと話し合いました。

二月六日（土）午後、第54回学習会を安曇川公民館で行いました。

素読の後、「いわゆる身を修むるには、その心を正しうするにありとは・・・」の項を学びました。この

項の概意は、「心身は別々のものではなく一体であるからまず心を正さなければならない」。ここで釈尊

の説かれている心の中身の話をしました。水は水の成分で成り立っています。塩が入れば塩水になり、アルコールが入ればお酒になり、毒が入れば毒水になります。同様に、心も五十二の心所（成分）から成り立つています。まず共通心所・必須心所という基礎的なものがあり、次に「欲」、「怒り」などの不善心所があります。心が不善心所におおわれていては、「素直な心がいかに大切であるか」について語り合いました。

『大学』を素読の後、「富は屋を潤し、徳は身を潤す。心広く体ゆたかになります。故に君子は必ずその意を誠にす」の項を学びました。この項の概意は、「心身をゆたかにするためにには善い心を持つよう努力するこ

とが大事である」ということです。フリートーキングでは「徳とは何

め方が変わつてくる」などと語りました。

三月五日（土）午後、第55回学習会を安曇川公民館で行いました。

最初にある事例を出して、いくらお金稼いでもそれを自分のためだけに使うことは評価されないし、幸せになれない、という話をしました。

素読の後、「心ここに在らざれば、見て見えず、聴きて聞こえず、食らいてその味を知らず。これを身を修るには、その心を正しうするに在り」というの項を学びました。この項の概意は、「心が本来あるべき良知から離れていると、視ても聞いても食べても本来のものを感じることができない。ましてや思うこともできない。したがつて心を正しくしなければならない」。ここで良知とは釈尊の説かれている善心所であるが、良知と離れていては、「孝」という字には酵母の「酵」という字には藤樹先生の「孝」が入つていて、活発な議論がなされ盛り上りました。ここ数回、大阪から若い伊藤氏も参加されていて、新しく参加される方が徐々に増えています。「学ぶは樂し」。皆さまのご参加をお待ちしています。



今回で一年三ヶ月かけて学んだ『大学解』を終わりました。その後、懇親会を楽しみました。

【藤樹人間学塾 平成28年度予定】

○5月7日（土）、○6月18日（土）、
○7月2日（土）、○8月6日（土）、
○9月10日（土）、○10月1日（土）、
○11月5日（土）、○12月3日（土）、
○1月14日（土）、○2月4日（土）、
○3月4日（土）

時間 15時～17時
場所 安曇川公民館
○印は塾を終了後懇親会あり

四月二日（土）午後、第56回学習会を安曇川公民館で行いました。今回から『孝經啓蒙』のスタートです。最初に学習会の名称を「藤樹人間学塾」に変更し私が塾長になることを了承していただきました。

初参加の方もあつたので、まず藤樹先生の「孝」の思想の話をし、それを了承していただきました。

西晋一郎先生の序文を読み進めました。フリートーキングで川越さんから「高島市には藤樹さんの酵母菌が住み着いているので、外から来た人が良い気分になられるのだ」という意見発表があり、そういえば酵母の「酵」という字には藤樹先生の「孝」が入つていて、活発な議論がなされ盛り上りました。ここ数回、大阪から若い伊藤氏も参加されていて、新しく参加される方が徐々に増えています。「学ぶは樂し」。皆さまのご参加をお待ちしています。

特別寄稿

今も活きる滋賀県立
藤樹高等女学校の足跡

高橋 志郎



去年（平成二十七年）十月に高島掃除に学ぶ会で市立高島中学校にお世話になった折に、自分自身の出身校でもある当中学校の前庭にある「ヒマラヤ杉」と玄関に掲げている「修身堂」の書額を見つけ、この二つが昭和十一年にこの地で開校された「滋賀県立藤樹高等女学校」の足跡であることを再確認しました。

ところが、昭和二十四年に藤樹高等女学校の校舎が高島高等学校に移行されて六十七年も経過している現在、二つの足跡がいつたい何なのかも十分伝承されていないことに気づきましたので、当会報の紙面をお借りして、再確認の場といたします。

「修身堂」の書額を見つけた「ヒマラヤ杉」と玄関に掲げている「修身堂」の書額を見つけ、この二つが昭和十一年にこの地で開校された「滋賀県立藤樹高等女学校」の足跡であることを再確認しました。



（当時の卒業アルバムにも掲載）また、この書は京都帝国大学名誉教授高瀬武次郎氏によるものです。氏の書は一昨年訪れた日野小学校に掲げられていた「良知」の大きな書額が私にとりましては初見です。後から調べますと、京都市北区にあつた旧高瀬宅の中江藤樹の顕彰碑は割り貫いた石のスペースに藤樹先生の像が安置され、その像は外側に向かつて道行く人々を見守つていたようです。今は良知館と藤樹書院の間に移設され、その他の石碑は陽明園の北西角にあります。

また、藤樹神社にある神社創立十周年記念碑の撰文は高瀬氏によるもので、藤樹神社の創立に至る機縁と、その経過について、じつに簡潔明瞭に書かれています。

昭和十三年五月に女学校の落成式が挙行されており、氏が揮毫されたのはそれに合わせて前年の十二月であります。高瀬氏は当時藤樹頌徳会の顧問であつた関係であろうと推測します。

高瀬氏の書は藤樹記念館に多く収蔵されています。

「修身堂」というのは、江戸時代高島市勝野にあつた大溝藩の藩校の名前で、藤樹高等女学校の講堂を「修身堂」としていたようです。



藤樹高等女学校 落成式 学校長式辞

②初代校長松本義懿氏

高島藤樹会顧問の松本孝太郎氏の父上であります。

氏は石川県生まれで、石川県師範学校卒業後、広島高等師範学校教育科を卒業。その後東京市立浅草実務女学校に奉職と同時に、東洋大学に籍をとき学びを続けられました。昭和十一年に滋賀県立藤樹実科高等女学校が新設される際に、その校長に迎えられました（三十九歳）。当時旧高島町では旧制今津中学校が旧今津町に設置されたため、旧高島郡南部に何とか県立学校を設置したいという動きがあつたようで、当時の滋賀県議会議員の上原茂次氏と前田節氏は県議会で女子教育の重要性を説き、県立女学校の実現に尽力されました。

開校に際し、両氏および教育関係者、そして初代校長のご尽力で全国各地から新進気鋭の教師を招聘され、校歌の作詞は与謝野晶子氏が手

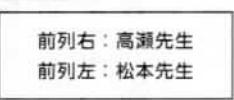
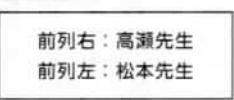
がけるなど、かなり充実した高等女学校であり、全国の公立学校で個人の名前を冠した唯一の文字通り藤樹教育を実践される場になりました。

③新制高島中学校改築

前述のように、旧制藤樹高等女学校は昭和二十四年には前年に統合された県立高島高等学校の校舎に生徒が移ったあとは、旧高島町立高島中学校の校舎として昭和四十五年まで使用されていました。当時の先生のお話を聴きますと、「修身堂」の書額は家庭科室に掲げてあつたようですが、ヒマラヤ杉も大切にされていたようです。



前列右：高瀬先生
前列左：松本先生



言と貴重な資料を拝読するにつけ、
この一連の情報は是非ともまとめて
おくことが大事なことだと意を強く
した次第です。

願わくば、当時の女学校で学ばれた方々に思い出話をお聴かせいただ
き、内容を充実したいと思います。

- ・「藤樹研究」第六卷第一号
(昭和十三年十二月発行)
 - ・「道心に訴える」
(昭和二十八年八月発行)
 - ・松本義懿著「町報たかしま」
(昭和四十六年八月発行)
 - ・ウヰキペディア

藤樹高等女学校の沿革

昭和二年

大溝町立大溝実科高等女学校
昭和十一年

滋賀県立藤樹実科女学校

滋賀県立藤樹高等女学校（改称）

時和二十三年

学制改革により滋賀県立今津中学校と滋賀県立藤樹高等女学校を統合し、滋

賀県立高島高等学校として開設

旧藤樹高等女学校校舎を廢止し、今津

校舎に統合。旧校舎は高島町立高島中学校として使用される。(なお、文章内での表現は最終名であります滋賀県立藤樹高等女学校といたしました。)

「藤樹紙芝居」の紹介⑤

『追いはぎと先生』

(解説)

この話は、先生が大洲から生まれ故郷の小川村に帰り、次第に学問が深まつていったころの話です。

- 「混沌」第十五卷第四号
（昭和十一年四月発行）
「混沌」第十五卷第七号



藤樹先生は門人だけでなく、夜、書院（学問所）に集まる村人に話をして、近隣の村々から請われると

で、反省の気持ちをくみ取つた先生は、追いはぎたちと円座になつて腰を下ろしました。

「人はだれでも、時々心が曇ることがあるが、自分の過ちに気づいて心を磨き直して精進すれば、だれでも聖人になれる」と、教えました。

院に行き、それを糧にして真面目に働いたと伝えられています。

近い村で話を終えて、近道である川に沿った、竹やぶの続く「馬通し」を通って帰ることにしました。当時、この地域では「追いはぎが出る」という噂があったので、先生は護身用に大小の刀を身に付けて、外出していました。

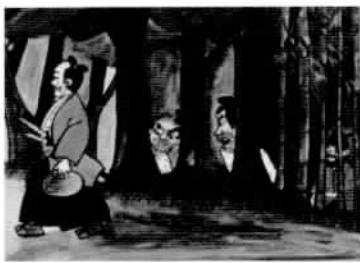
わってもらえるかと思います。

うつそうとした暗い竹やぶの間から追いはぎが出てきたのです。手持ちのわずかな金を与えようとするとして、満足せず刀を抜いてかかるとしてきました。「戦うなら名を名乗るのが、武士のしきたり」と言つて、先生がまず名乗ると、追いはぎたちは、『中江与右衛門』という名前を聞き、驚きました。とんでもな

い無礼を働いたと、土下座をしてしまいました。当時、誰にでも親切で高徳な学者先生であり、人々から『聖人』と慕われていた中江藤樹先生に刃を向けたからでした。そこ

(紙芝居)

- ①ある晩、藤樹先生は、一里ほど（約四km）離れた村へ出かけて、勉強会をしました。たくさんの村



人が集まり、先生のお話を熱心に聞きました。藤樹先生は思わず、「おや、キツネかタヌキでもいるのかな」と言いました。

村人「先生、良いお話をしてもらいたい、みんなが喜んでいます。」



③とつぜん三人の男たちが、飛び出してきました。藤樹先生の行く手をふさぎました。刀を抜いた頭らしい男が、大声で言いました。

追いはぎ頭「ちよつと、待つてもらおうか。」

先生「何の用だ。荒っぽいではないか。」

追いはぎ頭「おおかしら。この男、刀を一本もさしていませんよ。」

先生「命が惜しければ、刀も着物も全部おいてさっさと行け。」



藤樹先生は、目を閉じて腕組みをし、考える様子を見せました。

先生「どうして、私がお前たちにそこまでしてやらなくてはいけないのか、考えてみよう。……」

追いはぎ2「おいおい、いつまで待たせらる気じゃ。」

先生「早くしろ。」

藤樹先生は、しばらく考えて、かつと目を開き、大声で言いました。

⑦男たちは、刀を納めて、地面に

ザーッと、音がしました。

先生「困ったことを言うな。これだけしか持つておらぬが、二百文ほどはある。腹がへっているなら飯代ぐらいにはなるだろう。」

追いはぎ1「えつ、たつたそれだけか。」

先生「腹はじゅうぶんぶくれるぞ。」

追いはぎ頭「そうか、命が惜しくないと見える。それならば……。」

先生「よし、刀を構えたところを見ると、お前たちは、さむついだな。」

先生「うなばら、」

追いはぎ頭「えーと、小川村の中江与右衛門と言えば、あの有名な中江藤樹先生ですか。」

先生「そうだ。私の名前を知っているのか。」

追いはぎ頭「まさか、ここで近江聖人と言われている藤樹先生に出会うとは思わなんだ。どうしよう。」

おや、きれいなお月様が出ています。でも、夜道は気をつけて帰つてくださいね。このごろ、わるい追いはぎがちょいちょい出るといううわさを聞いていますよ。」

先生「ああ、私も聞いたことがあります。村の方たちと、色々話をしていたら、遅くなつてしまいまよ。さあ、急いで帰るとしましょう。」

②先生は、竹やぶの暗い道をしばらく歩いていきました。

—声をひそめて—

すると、物陰からなにやら動くような気配がしました。それに続いて、カサ、ザザ

—声をひそめ—

「さつと、ぬく—

④追いはぎ1「おれたちは、腹がへつている。金をくれ！」

先生「そうか。金なら、少しほつていて。やつてもいいぞ。」

—声をひそめて—

追いはぎ2「おおおお、いつまで待たせらる気じゃ。」

先生「早くしろ。」

藤樹先生は、しばらく考えて、かつと目を開き、大声で言いました。

⑥先生「よし、刀を構えたところを見ると、お前たちは、さむついだな。」

先生「うなばら、」

追いはぎ頭「えーと、小川村の中江与右衛門と言えば、あの有名な中江藤樹先生ですか。」

先生「そうだ。私の名前を知っているのか。」

追いはぎ頭「まさか、ここで近江聖人と言われている藤樹先生に出会うとは思わなんだ。どうしよう。」

お前たちに何もかもやる理由が見つかぬ。」

追いはぎたちは、いつせいに刀をぬき、今にも飛びかかりそうな身構えをしました。追いはぎの頭は言いました。

先生「困ったことを言うな。これだけしか持つておらぬが、二百文ほどはある。腹がへっているなら飯代ぐらいにはなるだろう。」

追いはぎ1「えつ、たつたそれだけか。」

先生「腹はじゅうぶんぶくれるぞ。」

追いはぎ頭「そうか、命が惜しくないと見える。それならば……。」

先生「よし、刀を構えたところを見ると、お前たちは、さむついだな。」

先生「うなばら、」

追いはぎ頭「えーと、小川村の中江与右衛門と言えば、あの有名な中江藤樹先生ですか。」

先生「そうだ。私の名前を知っているのか。」

追いはぎ頭「まさか、ここで近江聖人と言われている藤樹先生に出会うとは思わなんだ。どうしよう。」



ひれ伏しました。
その様子を見た藤樹先生は、静かに刀をさやに納めました。

追いはぎ頭「藤樹先生、情けない姿を見せてしまいました。おゆるしくださいませ。」
頭に続いて、手下の追いはぎ達も、口をそろえてあやまりました。

新田開発に生涯をかけた
「松本彦平」氏

洲崎 富士夫

一、新田開発の概要
高島市にある箱館山スキー場の近くに、伊井・酒波・平ヶ崎・構の四集落があります。

かつて、この地域はわずかばかりの田畠と多くを占める原野（荒地）が広がっていました。そのため、昔からこのあたりの住民は、この荒地を水田に変え、米の増収によつて豊かな生活をしたいという強い願いがありました。

しかしながら、この地がやや高台にあつたため（岡とよばれていた）、周辺の河川から水を引くことができず、開発を進める用水の確保が困難なためなかなか工事を行うことができませんでした。

そのような中で、地域の人々の長年の願いを実現するため、大正二年（一九一三）四集落は、淡海耕地整理組合を立ち上げ新田開発に乗り出しこの難工事を開始しました。



淡海湖全景

した。その先頭に立ち、多くの苦労を重ねながらも、その事業を成し遂げるため尽力した人が松本彦平氏です。松本彦平氏は、安政三年（一八六五）六月一五日に高島市今津町日置前（平ヶ崎）で生まれました。みんなに親しまれ、信頼される人であつたといわれ、後に、川上村長や郡会議員を務められるなど地元の名望家でもありました。

彼の指導のもと工事は以下の大きく三部で進められました。

①箱館山の西方にある高所、奥深い山中である赤坂山川原谷に貯水量一三二万m³の人造湖「淡海湖（処女湖）」を作りました。

工事現場が山麓より高所・遠距離のため資材等を運ぶには大変な苦

労がありました。また、冬期は豪雪地であるため工事ができず工事期間が伸びました。

②貯水池（淡海湖）から、水をふもとへ流すための隧道（通水トンネル一二二三m）を作りました。地質がトンネルを掘るには、不向きだったため、落盤事故が相次ぎ予定ルートの変更を余儀なくされることもありました。硬い岩盤に当たると一日で一五回しか進めないこともあるなど難工事の連続でした。

③淡海湖（貯水池）と隧道（通水トンネル）が完成するといよいよ新田の開発が始まり、今まで荒地だった土地が七〇町歩（最終的には約一〇〇町歩）の田圃に変わり、長年の地域の人々の願いが実現しました。

二、指導者としての松本彦平氏

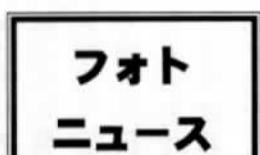
この大工事には、莫大な資金が必要（銀行等からの借入には、村人の田畠、財産等を担保にする）だつたため指導者松本彦平氏にとつて、工事の完成を危ぶみ反対する人々を説得したり、資金調達（工事の延長、物価の上昇等で経費は増え続けた）に奔走したりする日々が続きました。しかしながら、大正八年（一九一九）六三歳で工事の完成を見ずに亡くなられました。（この工事は長男松本彦五郎氏に受け継がれました）。昭和一年に完成しました（その後も修理等続く）。

三、先人の努力への感謝

この工事の完成により約一〇〇町歩の新田が開発され、地域に豊かな恵みをもたらしました。川上祭の祭祀が行われる場所（高島市今津町日置前）に「淡海惠郷」という顕彰碑文が建っています。その碑文には、難工事の概要や完成に向かつて尽力した松本彦平氏など多くの人々の苦労の他、「今後、先人の苦しいたたかいの跡を思い出し、奮い立ちあがろうとする気持ちが起こることを本当に願い、わけをここに記します。」と後世の人に向けて書かれています。先人が築いてくださった恩恵に感謝することの大切さを強く感じさせられます。



安曇川町内小学3年生の「立志祭」
(安曇川公民館3月7日)
(保木隆氏 撮影)



良知館通信③

山本 義雄

熊沢蕃山入門懇願の跡

藤樹書院境内に西側中ほどに藤の木が植えてあります。かつて、中江家の門はこの辺りにありました。

熊沢蕃山は優れた先生を求めて各地を回っていたのですが、「これだ」という先生に巡り会えずにいました。

直馬子の話を聞いて、藤樹先生を訪ね教えを請います



が、先生は「自分は師たるに足らざる」と断ります。蕃山は一旦桐原（近江八幡）へ帰り、再び小川村を訪ねますが許されません。蕃山は、この場所に二夜座して懇願し、やつと先生のお母さんの取りなしによつて許されました。

先生のもとで学問に励んだのは、僅か八ヶ月でしたが、先生はわが心友であると別れを惜しみました。この蕃山に藤樹先生が送った手紙に「吾、徳あらざれども、隣あるの樂

しみあり」と記されました。このことは、論語の中での「徳は孤ならず、必ず鄰有り」の徳を積むということは、所謂孤独ではない、必ず誰かが知つていてくれる。これは、私はそんなに徳はないけれども、謙虚さと心の深さは大変見事で蕃山が来てくれた事をとても喜んでいるのです。蕃山は後に池田光政に仕え、異色の経世家として著名になりました。その後、古河（茨城県）に幽閉されて亡くなりますが、それまで四十年間先生の命日には欠かさず墓に詣でたのです。

ここはその様な羨むばかりの師弟関係が生まれた場所です。

楷の木

平成十三年三月岡山県備前市の梶田博嗣氏が寄贈された閑谷学校ゆかりの楷の木。この高木の原産は山東省曲阜の孔子廟です。

楷を日本に入れたのは白沢保美林学博士である。大正四年中国の孔子廟から種子を持ち帰り苗を育て孔子のゆかりのある場所へ寄贈されました。学問の象徴としての孔子廟との



繋がりでカイノキが日本各地に好んで植えられて、学問の聖木として定着している。熊沢蕃山先生が修学された藤樹書院に植えられ孔孟の学の興起を使命とされた。

藤樹先生のこの地に植えられた事は、すこぶる意義深いものです。ウルシ科の落葉高木でランシンボクとも呼ばれています。

中江藤樹・心のセミナー

「心のセミナー」は、広く市民の皆様に藤樹さんをもつと身近に知つていただきたいと願つて、昨年に引き続き『近江聖人・中江藤樹』の映画鑑賞会として、朽木及び今津の地域で開催しました。

先ず二月二十七日（土）の午後に、朽木やまびこ館で開催しました。小学生からお年寄りまで、約四十名（会員を含めて）の方が来場されました。

続いて二月二十八日（日）の午後には、今津東コミセンで開催しました。

この日は、会員を含めて五十余名の方々にご参りました。

あとがき

すごいことが身近にあつても、これまで知らなかつた、気づかなかつたということが、この歳になつて、あまりにもたくさんあります。今回の各寄稿文からも、実に多くのことを学びました。

ご参加いただきました皆様、本当にありがとうございました。（事務局）

賛助会員一覧

（新規加入）

○八田建設株式会社

勝野

○株式会社大山建設

○既加入

○ウエストレイクホテル可以登樓

○株式会社桑原組

○有限会社宏和商事

○有限会社白浜荘

○社会福祉法人新旭みのり会

○ソエダ株式会社

○株式会社TADコーポレーション

○鉄屋商事株式会社

○株式会社戸井薬局

○とも栄藤樹街道本店

○中村印刷株式会社

○株式会社中村測量設計

○ニッケイ工業株式会社

○有限会社馬場塗装

○三田村印刷株式会社

○有限会社綿庄食品店

（五十音順）

（H・M）